



TITLE:

[餘白碌]象の後退

AUTHOR(S):

宮崎

---

CITATION:

宮崎. [餘白碌]象の後退. 東洋史研究 1957, 15(4): 396-396

ISSUE DATE:

1957-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145898>

RIGHT:

あるが、雍正帝自ら、著しく秘密でない奏摺は他人に代筆させても構わぬと申渡していることもあり、此に胥吏に非ざる胥吏、士大夫的な胥吏とも言うべき幕友の活躍する分野が開けてきた。幕友政治は雍正から乾隆時代を頂點とし、その後次第に墮落しながら清朝末年まで繼續した。ここに胥吏の學問とも言うべき吏學の外に、幕友の學問としての幕學なる名稱が發生した。これも奏摺政治の一影響である。

なお其他に雍正帝の奏摺政治について語るべき點は甚だ多いが、與えられた紙數も既に超過したので、機會を待つて補足することにしよう。

〔附記 本研究および本號掲載の各研究は昭和三十一年度文部省科学研究費の交付によつて行われた雍正時代史研究の一成果である。〕

## 〔餘白錄〕 象の後退

最近新聞紙の報道によると、中國雲南省の南部、ビルマ國境に近い瀾滄江周邊の大森林中に二十頭乃至三十頭の野生の象群が棲息していることが發見されたと言う（大阪朝日、昭和三十三年三月五日）。中國では南北朝時代までは揚子江の線まで時々野象が出沒した。劉宋の沈攸之は江陵城北數里に現われた象三頭を格殺し、梁の天監六年三月には三象が京師に入つたと見えてゐる（宋書卷七四・梁書卷二）。それが五代宋頃になるとサつと南の五嶺の線まで下つてきた。南漢の時代、東莞縣に群象が出て稼を害したので官が之を殺し、禹餘宮使の邵某がその骨を集めて資福寺の前に石塔を建てたという（南漢春秋卷十二鎮象塔）。また宋代に福建路の漳州漳浦縣の山に群象があつて民患をなすので、政府は捕虎の賞格により人が之を捕殺しその牙を賣りて官に入ることを許したことがある（續資治通鑑長編卷二四九、熙寧七年正月庚申條）。これで見ると古代には恐らく黄河の邊まで棲んでいた象が次第に人間に追われて後退したと思われる。兎角人間という奴は自然界で一番の嫌われ者らしい（宮崎）。